

古代エジプトにおけるスカラベ形印章

松永 修平

はじめに

古代エジプトにおける特徴的な思想として挙げられるものには、まず「再生」や「復活」などが考えられる。古代エジプト人たちはフンコロガシが糞を転がす様子を太陽の動き様に捉え、そのことからスカラベを頭部に持つ姿で描かれるケプリ神を太陽神、創像神と同一視した。そのため彼らはスカラベを「創造」や「再生」と関連づけ、あの世での復活を願いスカラベをモチーフとした装身具を多数製作していた。

一、先行研究

十九世紀にピトリが王名などをもとに時代ごとにスカラベ形印章を配列して以来、様々な研究がなされてきた。マーティンによって中王国時代と第二中間期を中心とする印章の網羅的な研究がなされ、また彼は型式学的にも底面、背面、側面をそれぞれその属性に基づいて、九、十一、七つに分類した。さらにオコーナーにより背面を十一の形式に分類することによる編年を提示した。タフネルは

よりデザインの属性の分類を提示し、さらにワードとデヴァーが頭部、背面、側面の属性を分類し、約二五〇〇の印章の属性の時代別の変遷を示した。

二、問題点

スカラベ形印章の出土自体はエジプト全土で非常に多く見られるが、その出土状況が詳細に知らされているものは少ない。そのため、これまでは底面に刻まれた王名や個人名などから時代を推測することで編年を決定している場合がほとんどであった。しかし、スカラベ形印章が製作され始めた時期以前の王名が見られるなど、その王名を見るだけで印章の編年を決定できるとは言えないことなどの問題点も指摘されている。一方、テル・エル・ダバ遺跡の報告はその出土層位などが詳細に知らされているため、その出土層位ごとのスカラベ形印章の属性を見ることがスカラベ形印章の編年を決定できると考えられる。

三、分析方法

テル・エル・ダバ遺跡出土のスカラベ形印章をワードとデヴァーによって提示された頭部、背面、側面の属性と、タフネルによって提示されたデザインの属性に基づき分類し、ムリナーによって提示された六つのタイプに基づいてタイプ分けを行う。

四、分析結果・考察

対象スカラベをタイプ一から六に分けた結果、それぞれタイプ一から六まで、十八点、十二点、二十九点、四四点、五点、二四点となった。

タイプ一…頭部は主に四角形と台形で表現されており、背面は会合線が描かれるものとそうでないものがそれぞれ、十一点と七点見られる。側面は彫込みのあるもので、四角い形状をしており、足は全て明確に描かれているもので、ワードらの分類よるところのdタイプに属する。

タイプ二…頭部の形は全て三日月型である。背面もまた全てに会合線が刻まれている。側面はタイプ一同様、dタイプである。

タイプ三…頭部は全てが開放型（砂時計型）で描かれている。背面は会合線が描かれるものと描かれないものそれぞれ、十一点、十八点見られた。側面はタイプ一、二とは異なり、切れ込みが台座で分離し、足は彫込みや切れ目で表現されるもの、ワードらの分類によるeタイプに属するものが一点を除き、それに分類される。

タイプ四…頭部は一点開放型がある以外はすべて、台形か三角形をしている。背面は会合線が描かれるものが十二点、描かれないものが三二点である。側面はdタイプが二点、eタイプが四二点である。

タイプ五…頭部は開放型が二点、台形、三角形のものが三点である。背面は全て会合線が刻まれていない。側面はdタイプが三点、

eタイプが二点見られた。

タイプ六…頭部は三日月型が一点、開放型が二点、台形、三角形をしているものが二一点である。背面は会合線が刻まれていないものが十九点、刻まれているものが四点であった。

以上をまとめると、頭部は三日月型、開放型、四角形が主流であったタイプ一～三から、それ以降では台形や三角形をしているものへと変化している。背面に関してはタイプ二、三のテル・エルⅡダバで作られたものとされる印章は背面に会合線が刻まれるものがほとんどであったのに対し、それ以降の時代では会合線が刻まれないうようになる。一方側面は、タイプ四でeタイプがほとんど見られるのに対し、エジプトで製作されたものはdタイプがほとんどである。またデザインに関してはそれぞれのタイプで際立った差異が認められない。頭部や背面の属性の変遷からはある程度時代による変化を確認できるものの、他の点からはそれを見てとることができない。編年を決定するためには更に他の基準を設ける必要がある。

おわりに

今回のタイプ分類ではテル・エルⅡダバ出土のスカラベの編年を組むことはできなかったため、今後は層位ごとにスカラベを並べ直し考察していかなければならない。また層位ごとに見ていった場合でもスカラベ形印章自体が伝世品であることは度々指摘されているため、この点についても検討を加えねばならない。